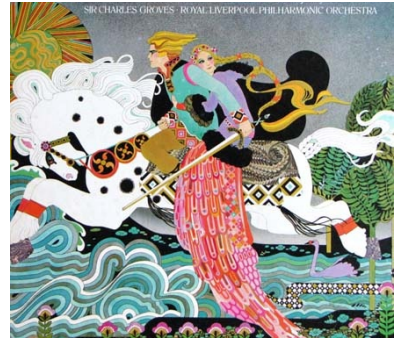


シベリウスの「4つの伝説曲」はフィンランドの叙事詩「カレワラ」にインスパイアされた交響詩で、右は僕が持っているレコードのジャケットです。フィンランドの深い森を思わせる曲は北欧の人々の「森の神々」への憧れと恐れがあります。今月はこのカレワラの物語を書いてみました。



1. レミンカイネンとサーリの乙女

レミンカイネンはたくましい若者だったが、軽率でよく騒動を起こすし、毎晩遅くまで大勢の娘たちと騒いでいた。レミンカイネンがサーリの乙女キュリッキに求婚しようとした時、母親はこれを押しとどめて言った。

「行くのではないよ、立派な家柄の娘の許へ。そこの娘はお前を笑うだけだよ」

だが、レミンカイネンは自分の力に自信を持っていた。彼は母のいさめに耳をかさず、馬を走らせた。サーリとして知られる村へ、サーリの美しい乙女、「サーリの花」に求婚するために。

月に照らされた野原で娘たちが踊っていた。むら気なレミンカイネンは自分の馬でその中に乗り込むと、キュリッキをそりに乗せ、娘たちの笑い声の中を馬にむちを当てて走り去った。キュリッキは嘆いて言った。

「私は無駄に生まれ、無駄に人生を送ってきたわ。私は何の価値もない、粗野で乱暴な男の手に落ちてしまったわ」

それからキュリッキは顔をあげて、レミンカイネンに言った。

「刃先のない小刀で馬の毛を切り裂き、結び目が分からぬよう卵を結びつけることができるなら、私は妻になりましょう」

「お前が縫い目も、針仕事の跡も残さずにシャツを縫ってくれるなら……」

「金銀を望んで戦(いくさ)に行かないと、永遠の誓いを立てなさい」

「お前が一人で村へ出て、娘たちと踊らないと誓うなら……」

こうして、サーリの乙女はレミンカイネンの妻になった。

2. レミンカイネンとトゥオネラの白鳥

レミンカイネンは戦に行くこともなく、おだやかな日が続いた。

だが、ある日レミンカイネンは魚の産卵場へ出かけ、夕方家に戻らなかった。次の日も、その次の日も。そこでキュリッキは村へ出て、娘たちと踊った。

むら気なレミンカイネンは激しく怒って、妻に向かって言った。

「サーリの花と言われた女よ！ もし俺のシャツを洗うなら 黒い蛇の毒の中で急いで干してもらいたい。俺が戦に行くために、ラップの子らの領域へ」

キュリッキは、レミンカイネンを思い止どませようとしたが、若者は鋼のベルトで身を固め、刀を腰に結びつけ、馬に引き具をつけ、そりに乗り込み、むちで馬を駆り立てた。一日進み、二日進み、三日目にポホヨラに到着した。

ポホヨラの館に近づいて家の中を覗き込むと、部屋は呪術師でいっぱいだった。彼らはラップの歌をかん高い声で歌っていた。レミンカイネンは片隅から忍び込むと、そこにいる魔法使いたちに呪法をかけ、呪法の歌を歌い始めた。ラップの呪術師たちは水のない野原に、耕せない土地に、魚のない池に歌い変えられた。

それからレミンカイネンは、ポホヨラの魔女に申し出た。

「奥さん、あんたの娘さんを下さい。一番の美人を」

「あんたには娘はやれないよ。あんたには村に妻がいるじゃないか」

「キュリッキは家からは出ない。ここではもっといい人を貰いたいのださ」

「怠けて役に立たない男には娘はやれない。あんたがヒーシ（悪魔）の鹿を捕らえることが出来たら、娘に求婚してみるがいい」

そこで、レミンカイネンはスキーの杖の先に輪をはめ、スキーの底に脂肪をたっぷり塗り込んだ。

「この森には、おれが左スキーを押し出し、右スキーをかかとで蹴って追い込めば、捕らえられない動物はいないさ」と、レミンカイネンは豪語した。

それを聞いたヒーシは鹿を組み立てた。腐った木から頭を、柳の枝から角を、岸の若木からその脚を作った。ヒーシは鹿に教え込んだ。

「さあ、走れ、ヒーシの鹿よ。ラップの子らの領域へ！」

むら気なレミンカイネンは鹿をスキーで追いつけたが、鹿は見当たらなかった。レミンカイネンは鹿を追うべきか家に帰るべきか迷ったが、タビオ（森の主）の主婦が彼に味方した。タビオの主婦はヒーシの鹿を隠れ家から連れ出して追いやったってくれたのだ。

レミンカイネンは鹿を投げ輪で捕らえると、ポホヨラの魔女の元へ連れて行き、

「さあ、あんたの娘さんを下さい」

「ヒーシの栗毛の馬に馬具をつければ、あんたにわたしの娘をあげよう」

レミンカイネンは金の手綱をとり、銀の端綱をとって金のたてがみの馬を探しに出掛けた。三日目に彼は金のたてがみをした馬を縦（もみ）林の中に見つけた。その毛は火を放ち、たてがみは煙を吹いていたが、至高の神ウッコに助けられて彼はなんとか馬に馬具をつけることが出来た。

ウッコは氷のあられを馬のたてがみに降り注いでくれたのだ。

「ヒーシの馬に馬具をつけたから、あんたの娘さんを下さい」

「トゥオネラ（死者）の黒い川にいる白鳥を、一本の矢で撃つことが出来たら、あんたに娘をやることにしよう」

レミンカイネンは弓を肩にし、矢を入れた筒を背中にはたき、威勢よくトゥオネラの川へと歩いて行った。向こう岸にトゥオニの娘が洗濯をしていた。

「レミンカイネン、あなたはどのようにしてここにきたのですか」

「水におぼれたのさ」「嘘よ、それなら着物から水が流れているはずよ」

「火に焼けたのさ」「嘘よ、それなら巻き毛が焦げているはずよ」

そこで、レミンカイネンは「トゥオネラの川の白鳥を捜しに来たのさ」と言った。すると川から水の魔物が起き上がって、水蛇が水の中から伸び上がり、放たれた毒矢が飛んできて、左の脇を通して右の肩先へと男の心臓を突き抜けた。

レミンカイネンは激痛を覚えてうめいた。これを見ていたトゥオネラの娘が刀を抜いて、レミンカイネンの体を切り刻み、トゥオネラの黒い川の中へ投げ込んだ。こうしてたくましい若者は殺された。

3. レミンカイネンの再生

レミンカイネンの家では夫の安否を心配して、やさしいキュリックが毎日櫛を眺めていた。ある朝のこと、櫛から血が流れ落ちていた。妻は夫に未知の旅先で破滅が襲っていることを悟った。

「彼女は拳でそのスカートを、腕でその上着をたくし上げ、素早く長い道を走った。走りそして急いだ。彼女の行く手で山は鳴り、谷が起こり、山が沈んだ」

キュリックはポホヨラに駆けつけ、魔女に彼女の夫の行方を尋ねた。

「おおかた、狼か熊の口の中だろうよ」

「嘘よ、レミンカイネンなら狼や熊をひねり潰している」

「レミンカイネンなら白鳥を探しにトゥオネラの川をさ迷っているよ。だけど、どうして彼が身を滅ぼしたか知らないがね」

キュリックはトゥオネラの黒い川へ出掛け、必死になって彼女の夫の行方を捜したが見つからなかった。月に出逢って尋ねたが、月は知らないと言った。太陽に出逢って尋ねると、「あんたの夫は殺されて、トゥオネラの川へ捨てられた。遺体が急流を音を立てて流れて行った」と、教えてくれた。

そこで彼女は鍛冶イルマリネンの仕事場へ行って、鉄の歯のついた鋼の熊手を作ってもらい、トゥオネラの川に入ると急流の中を夫を求めて掻き寄せた。

彼女はトゥオネラの川に逆らって、掻き寄せられているうちに、シャツと帽子を見つけた。次に一方の手と頭が出てきた。さらに、背中の半分とその他の身体の肉片を手に入れた。彼女は、集めたものを繋いで夫の身体を組み立てた。最後に血管を呪言で結んだが、レミンカイネンらしい人はものが言えなかった。

そこで彼女は蜜蜂に、「九つの海の彼方に創造主の穴倉がある。そこに上等の軟膏があるから、それを持ってきておくれ」と、頼んだ。

蜜蜂は月の輪に沿って飛び続け、創造主の穴倉に入り込むと、金の壺の中で煮えている軟膏を手に入れ、羽音を立てて運んできた。

レミンカイネンの妻はこの軟膏を衰えたものの全身にくまなく塗りつけると、「さあ、起き上がりなさい。この邪悪な場所から」と、呼びかけた。

レミンカイネンは、眠りから覚めて起き上がった。
「あなたの運命に感謝して、助けくれた神を称えなさい」
レミンカイネンは、傍に来た白馬に彼の妻を乗せると、家を目指して駆けた。

4. カレワラと古事記

「カレワラ」はフィンランドの民族叙事詩。19世紀に医師のエリアス・ロンロートによって、フィンランドの各地に残る独特の伝説や伝承が集められ、壮大な神話として纏められたもので、1837年に「カレワラ」と題して出版されました。

当時のフィンランドは、1809年ロシア帝国に編入されたことを契機に民族意識が高まり、「カレワラ」はフィンランドの人々に共感を持って迎えられました。

「カレワラ」とは「英雄たちの地」という意味で、「ポホヨラ」という部族との対立と抗争を中心に物語が組み立てられ、ここで取り上げた「レミンカイネンの物語」は、壮大な「カレワラ」の一部のエピソードを取り上げたものだが、それはまた、シベリウスが作曲した「4つの伝説曲」の元になった物語なのです。

ところで、カレワラと古事記の類似性に言及した本(カレワラ神話と日本神話)では、この「レミンカイネンの再生譚」と古事記の「オオクニヌシ神話」の類似性が指摘されています。出雲神話の該当部分を見てみました。

『ヤガミヒメに求婚した神々は、ヤガミヒメが結婚相手に弟のオホナムジを選んだことに怒り、伯耆の手間山で、「赤い猪がこの山にいる。われわれと一緒に追い落としたり、お前はそれを待ち構えて捕らえよ」と言って、火で焼いた大きな石を落として、その焼け石を捕らえたオホナムジを焼き殺してしまう。

それを見た母親の神サシクニワカヒメがやって来て、赤貝の貝殻をすり潰した粉を母乳のように練った薬をオホナムジの火傷に塗ると、死んだオホナムジをは立派な男になって、蘇った。』

確かに同じ「英雄の再生譚」というテーマで、再生させるための薬が軟膏のようなものとか似たようなところがあるが、決定的に違うところがあります。それは主人公を生き返させるのは古事記では「母親」だが、カレワラでは「妻」。

実は、僕が書いた「レミンカイネンの物語」はウソです。元の話は古事記と同じで、レミンカイネンを再生させるためにやってくるのは妻のキュリッキではなくて「母親」なんです。で、この「母親が死んだ息子を再生させる」、ことが一番の話の類似点になっているんです。

元の話を読むと、レミンカイネンの結婚の話と、死と再生の話が全く別の話のようなので、僕は一つの話として面白くするために妻のキュリッキがやってくる話に変えたんですが、それでは民族の神話を正しく伝えることにはならないのでしょうか。神話に残された話には、それを伝えた人々の祈りがあるのでしょうか。なぜなら、もし死んだ子供を再生させる力が神から与えられるとしたら、神が選ぶのは、その子供を生んだ母親以外にはありえないでしょうから。